

山形県における人材育成の取組について

山形県置賜総合支庁産業経済部農村計画課

高橋 信博

棚田保全からはじまる地域づくり

“一村一〇運動のイメージ（事例の紹介）”



●榎平の棚田について

山形県朝日町は、町全体をエコミュージアム（生活環境博物館）と位置付け、町民主体のまちづくりを目指しています。平成11年に日本の棚田百選に認定された「榎平（くぬぎだいら）」は、棚田に隣接する展望地「一本松農村公園」からの眺望とともに、町民共有の財産であり、朝日町の自慢になっています。もちろん、博物館の重要な展示品（サテライト）となっています。

この小高い展望地では、山一面に「ヒメサユリ」が群生し、棚田の景観と併せ、住民・企業・NPOそして行政が、協力しながら保全しています。

見られる側の棚田は、あくまでも農業生産の場です。勾配のきつい農地、そして高齢化など、見せるための景観を守りながら営農を持続していくという作業の裏には、関係者の様々な苦労と約束事があります。

ここまでたどり着くまでの取り組みとその経過報告です。



●ことのはじまり（動機）

- ①棚田百選認定後、たくさんの方が棚田を訪れるが、地元住民は無関心。
- ②米価の低迷、耕作者の高齢化に伴い、稲作の後継者が不足。
- ③ついに、棚田区域内に耕作放棄地が発生。
- ④棚田は生産の場、見る側の都合だけに合わせられない。
- ⑤農業用施設の老朽化に伴い、維持管理への負担が増してきた。

●きっかけづくり（誘導）

- ①何かはしなければならない。それはわかっているが、誰が中心になり、何をどこから始めたら良いのかわからない。
- ②地元の農家から水土里ネット朝日町（土地改良区）に相談があった。
- ③そして改良区から、町を通して県に相談があった。
- ④改良区、町・県合同による、地域現状を聴き取る調査を開始した。
- ⑤手間（これ以上負担）の掛かることはしたくないという地域住民。
- ⑥言いたい放題言われても、金の掛かることは極力避けたい行政側の気持ち。
- ⑦ヒメサユリの保全ということでは、地域全体がまとまっているという事実。
- ⑧エコミュージアムの展示品といいながらも、守るのは農家という現実。
- ⑨今後、持続した営農は約束できないと言う高齢者。
- ⑩これらを話し合うワークショップを開催してみようという県側からの誘導。

●どう取り組んできたか（経過）

平成15年 関係農家27戸で榎平（くぬぎだいら）
棚田保全活動推進委員会を立上げた

※ワークショップ開催時の言い出しっぺ

平成16年 委員会が「棚田と地域の未来を考える」
ワークショップを開催（住民90名が参加）

※職業・年齢・性別の枠を超えた参加者で話し合った

平成16年 ワークショップで完成した活動計画と
マップを発表する棚田シンポジウムを開催した

※県内外からの250名を前に、将来の構想を発表した

平成16年 棚田受益者の奥さんたちで結成した、棚
田ママの会が発足し活動を開始した

※ワークショップから生まれた活動グループ（女性の参画）

平成17年 地域の活動として新スポット『第二展望
台』と『トイレ』の整備を実施した

※自分たちが費用を負担し、管理していく覚悟がついた瞬間

平成17年 地域住民や来訪者との交流の場として、
第1回「ヒメサユリまつり」を開催した

※棚田ママの会が大活躍、誰もが認める発表の場となった

平成17年 今までの活動が、第1回美の里づくりコ
ンクールにおいて、農村振興局長賞を受賞した

※保全活動の全国デビュー（活動の方向性を確認した）

平成18年 棚田保全活動に参加してくれる保全隊員
の募集を行った（参加者60名でスタート）

※県内外からの申し込みにおどろき（活動への対外的評価）

平成18年 労働力対価チケットを使った保全隊員の
活動が開始した

※春から秋まで農作業や地域環境保全活動を隊員がサポート

平成18年 自然杭掛け米と棚田景観の付加価値をプ

※知名度向上によるブランドの確立（継続した活動の成果）

平成18年 東京で開催された「第1回棚田フェス
ティバル」に棚田ママの会が参加した

※他地域のアイデアを知り、自分たちに生かす努力

平成18年 労働力対価チケットと地元農産物を交換
する収穫感謝祭を開催

※自分たちが作ってきた交流が形として現れた日

平成18年 棚田情報誌「榎平棚田通信」を発行し、
保全隊員の活動報告や次回作業予告を配信してきた

※地域内外に活動を知らせるパーツ



●活動成果と土地改良区や行政の支援（組み立て）

①ワークショップの開催

全てのきっかけとなるワークショップを開催する（したくなる）ための誘導や、実践組織の立上げまでの支援。ならびに、開催時のプログラム作成、進行などのアドバイスや技術的な支援。また、それらを材料として、地域の振興計画にまとめ上げ、実行時期や役割分担について、地域住民や行政機関の合意形成を図る手段を支援。

②計画から実行への移行

改良区、町、県が打合せながら、計画を実行に移していく地域での活動へのきっかけを仕組んできた。必要となれば、活動への費用を支援する事業についても、既存の事業を活用したり、新たに創設して対応してきた。

③逃げられない仕掛けづくり

関係者の枠を超えた地域住民と行政職員、そして全県にエリアを拡大した参加者を前に、自分たちがつくった「活動計画」を自らが発表する、棚田シンポジウムを開催した。様々な機関を巻き込んで、全県規模を対象として調整してきた。言うなれば「決意表明の会」という位置付けだ。

④対外的評価を得ること

そのたび活動を内外に予告し、結果についても報告することに慣れてもらった。関係機関へのプレスリリースはもちろんのこと、行政機関や団体が実施するコンクールへは、積極的に参加し、自分たちの活動がどう評価されるのか、どのような位置にいるのかを確認する機会を提供してきた。

⑤付加材料をつくる活動

ここ堰平の良い部分を、作物への付加価値として使えないかを話し合っていく。労働力の問題から、あきらめていた杭掛けによる米の自然乾燥や、棚田周辺の環境整備に非農家の労働力を借りられないか検討、棚田保全隊員を募集した。隊員の協力により、見事な風景が蘇り、この環境で造られる米に値打ちが付いた。

⑥付加価値米としての販売

まじめに作った棚田米を委員会として販売することにした。今年度産米のうち、全面積の約3割程度が企業や商工会青年部からの契約栽培米となった。個人農家の増収はもちろんのこと、付加価値分の一部を会で積み立て、労働力対価チケットの運営費用や、農業用施設の維持管理費への補填として活用されることになったのだ。

⑦課題の解決に向けて

ここまで活動が進んでくると、ことのはじまりとなっていた、地区が抱えていた課題が自然に解決へと動き始める。米価◎、労働力◎、共働による耕作放棄地対策◎、地元住民の関心と協力◎、維持管理費の負担対策◎、あとは、稲作に関心を寄せなかった若手の後継者を確保することが課題だ。対外的評価を得、向かうべき目標が形となり始めたいま、もう一押しという段階にたどり着いたという感触だ。

●大事なこと（展開）

①継続という努力

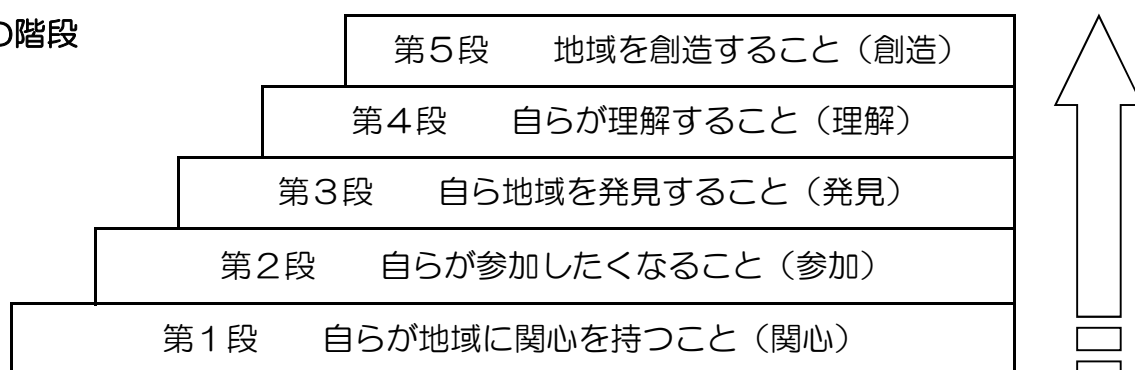
きっかけから計画に、計画から実践に、実践から成果へ、その場面ごとに行政が支援してきたからやってこれた部分がある。今後は、独り立ちして継続していける体制を地域で整備していかなければならない場面が来た。その努力をしなければ、継続はあり得ない。そのためには、行政が突き放したり、一気に引き上げるのではなく、いつでも相談役という立場に変わっていくことが必要だと考えている。

②活動に広がりをつける

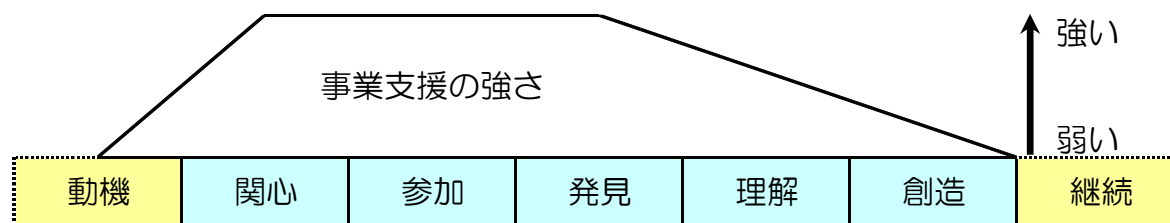
今回実践してきた棚田エリアでの活動は、あくまでもモデル的な実験であったが、現在地域全体の農業に影響を与えはじめている。この流れを逃がさないで、持続した集落営農を目的とした組織の立上げや、地域ぐるみの集落環境保全活動、そしてそれぞれが持っているノウハウを出し合い、互いに補える関係づくりに発展させていく必要がある。その基盤は完成しつつあると考えている。

●事業の狙うところ（目的）

①発展の階段



②事業支援の重点イメージ



③共働支援の持つ意味

- ・多様な部や課が共に考え、共に動き、共にノウハウを提供する仕掛けづくり
- ・地域、市町村、県が共有の目的を持ち「互いに補う関係づくり」